

## 単語カードを活用した情報関連知識の習得を目指した授業実践

大平 菜美加

長野県諏訪実業高等学校

namika22@m.nagano-c.ed.jp

筆者は勤務校の2年次選択科目として設置されている商業科目「ビジネス情報」において、情報関連用語の習得に難色を示す生徒が多数いることがわかった。そこで、単語カードを用い、自身で用語の説明や解説を作らせることで、意欲的に情報関連用語の習得を目指せるのではないかと考えた。本稿では、「ビジネス情報」の授業で行った単語カードの作成とその活用について報告する。

### 1. はじめに

筆者は商業科2学年選択科目である「ビジネス情報」を受けもった。選択者37名を19名と18名の2講座展開し、19名の講座を担当した。前年度に履修をしている「情報処理」では、PCの基本的な使い方やソフトウェアの基本的な動作について学習をし、また、基本的な情報に関連する知識を身につけた。2年生になり選択科目として設けられている「ビジネス情報」では、より応用的なソフトウェアの操作技術、情報関連知識を身につけることを目標として指導した。その中で検定試験の受験を行ったが、特に情報に関連する用語についての理解が2講座とも不十分であるという課題が発見された。

そこで、生徒に単語カードを作成させ、自身でその用語や意味を調べることで、情報関連知識の習得につながるのではないかと考えた。また、作成した単語カードを使い、早押し形式やカルタ形式で問題演習を行うことで、学習意欲の向上につながるのではないかと考え、2講座で実施した。

本講演では、2講座での単語カードを活用した学習意欲の向上や知識の習得を目指した授業実践を報告する。

### 2. 単語カードの作成

1月に行われた全商情報処理検定ビジネス情報部門2級では、講座内の合格者が約半数と伸び悩んだ。特に直前の指導では、情報関連用語の習得に苦勞している姿をよく見かけた。

そこで、2月の授業では、A5サイズの画用紙を配り、問題集に提示されている用語とその解説をする単語カードを作るように指示をした。2人1組となり、1組あたり8語程度の単語カードを作成するように分配した。図1のように単語カードのおもて面には、教科書や問題集に書かれている説明の文章と、その用語を覚えるうえで必要なポイントとなる部分への印付け、用語を覚えるためのヒントを書かせた。裏面には、おもて面で説明された用語を記載し、その用語を覚えるための

語呂合わせを記載させた。用語のヒントを作成させる際に、教科書や、問題集、インターネットで調べさせ、言葉での理解に加え、実物を見たり、実態をつかんだりすることでの理解を進めることに重点を置いた。特に、インターネットで調べ、画像を見ることで、理解を深めさせようと考え、画像などをヒントの欄に載せるように指示した。また、共同学習を意識して、2人1組のペアで単語カードを作成するように指導をした。

作成段階では、教科書や問題集から抜き出して説明を写したり、ポイントとなる部分に印付けをしたりする作業には、比較的スムーズに取り組んでいるように見えたが、ヒントを作ったり、語呂合わせを考える作業には手間取っていた。このことから言葉自体を覚えることができていても、その意味や内容などの深い理解まで進んでいなかったのではないかと考えた。

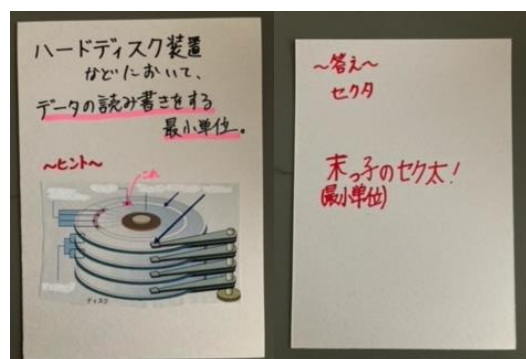


図1単語カード 左)おもて面 右)裏面

### 3. 単語カードを活用した問題演習

単語カードの作成が終わったところで、筆者が担当した講座の19名に対し、早押し形式で問題演習を行った。方法は以下のとおりである。

- ①講座内を2グループに分ける
- ②第1グループの名前をホワイトボードへ記入する
- ③第1グループに単語カードのおもて面(説明が書かれている面)を書画カメラで提示し、そこで説明されている用語は何かを考えさせる。

- ④わかった生徒は早押しボタンを押す。1番に押した生徒は提示したカードの裏面に書いてある用語を解答する。解答したら次の解答権はなしとする。
- ⑤正解したら、ホワイトボードに記載した名前の下へ正答数を記入していく。
- ⑥③～⑤を7分間行い、グループを交代する。
- ⑦第1グループと第2グループが終わったら、ホワイトボードに記載した正答数をもとに第1グループの正答上位4名と第2グループ正答数上位4名で決勝戦を行う。7分間③～⑤を行い、正答数上位1位から3位まで決める。この上位3名には景品を渡した。

また、もう一方の18名の講座では、カルタ形式で問題演習を行った。方法は、カードのおもて面を広げさせ、読み手が用語を読み、その用語についての説明が記載されているカードを探し、取りあうという手順である。

単語カードを用いた問題演習では、普段あまり発言をしない生徒も積極的な参加がみられた。反対に、自身が作成したカードにもかかわらず、答えを忘れてしまったり、わからなかったりするシーンもみられた。

#### 4. 結果と考察

問題演習終了後に、単語カードを用いた情報関連知識の習得について2講座37名にアンケートを行った。

単語カード作成と、問題演習を通して単語に対する理解度については、5段階評価を生徒にさせ、最も理解が深まったら5、全く理解が深まらなかったら1と評価をさせた。その結果、単語カードの作成については図2のように、5または4と回答した生徒が26名、問題演習についても図3のように、5または4と解答をした生徒が26名であったことから7割の生徒が情報関連用語に対する理解が向上したと感じていることがわかる。自由記入の感想では、「自分で作ったことで理解が進んだ」と回答をする生徒がいた。また、問題演習でも、「ほかの人が作ったカードを見ることができた」と回答をする生徒がおり、そこから理解へ進んだのではないかと考える。図4の単語カード作成時に苦労した点では、用語の解説が23件、語呂合わせが22件となった。スムーズに行えているように見えた教科書や問題集から説明を抜き取る作業や、用語を記入する作業もそれぞれ、8件と7件あがっている。このことから、言葉自体を覚えられていない生徒が数名いたことが考えられる。

以上のことから、単語カードを活用した情報関連用語の習得は多くの生徒が、理解が深まったと感じている。実際、検定試験では用語の習得が課題

であった生徒たちだが、単語80問を出題した期末考査では100点が4名、50点以下は2名のみと、課題を克服することができたと考えられる。しかしながら、自由記述のアンケートからは、「カード作成をグループにしたことで、他のグループの用語についての理解ができなかった」と感想が述べられている。このことからグループでの単語カード作成や、その活用方法の改善が課題であるとする。今後は、単語カードを実践的に活用する方法を考えたい。

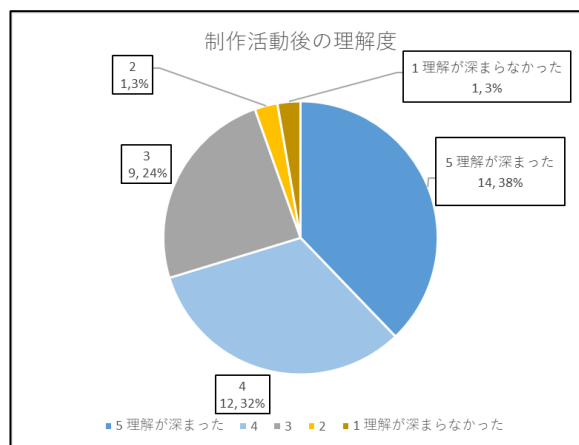


図2 制作活動後の用語に関する理解度

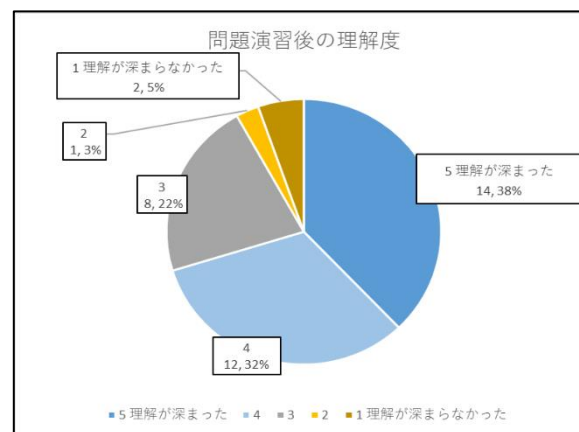


図3 問題演習後の用語に関する理解度

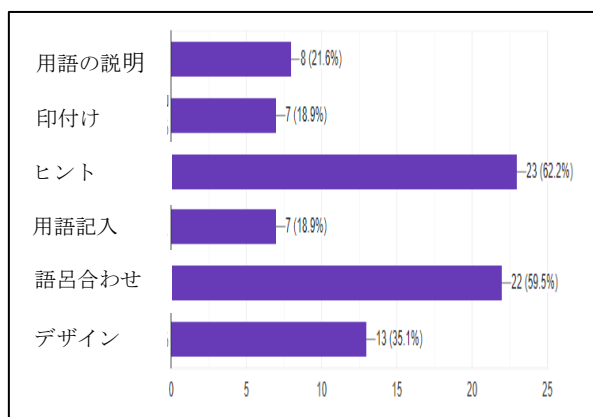


図4 単語カード作成時に苦労した点(複数回答可)